

今日の聖書のお話を始める前に、まず先に、先週の主日礼拝の中で、私が差別的表現をしたことを謝罪させていただけますでしょうか。

使徒パウロが癩癩という病を患っていたかもしれないというお話をした時、間違っただ先入観を植え付けてしまうような配慮のない無慈悲な差別的表現をしてしまいました。

特にその中で、「無意識の内に人に向かって攻めかかってしまうような」という表現は、無理解極まりない大きな誤りでした。

病を持ちながら、一途に生活しておられる方々やそのご家族、関係者、礼拝者である皆さんの心を傷つけた事をお許してください。

心から謝罪いたします。

今後このような過ちを犯さないよう懸命に努めたいと思いますので、どうかお許しくださり、お祈りいただけると幸いです。

すみませんでした。

「分からない後のこと」

伝道者の書 7 : 13 - 14

January.10.2021

伝道者の書 7 : 13 - 14

Preface

元旦礼拝、新年礼拝と2回に渡って、伝道者の書 7 : 13 - 14 の御言葉を見て参りました。

もしお聞きになっておられない方がおられましたら、(先ほどの謝罪の内容の部分はカットしてありますが) ホームページで見ることが出来ますので、お聞きいただければと思います。

今日は3回シリーズの最後となり、特に14節の「後のことを人に分からせなためである」という御言葉について考えていきたいと思ひます。

Part One

信仰を与えられ生きて行く中で、じっと聖書の御言葉を黙想し思い巡らして行きますと、一つ大事なことに気付かされます。

それは、「神様は、私たちを他のどこでもない、神様以外には目を向けることが出来ないような袋小路のような場面、場所、状況へと導いて行かれることがある」ということです。

その袋小路の場面や場所や状況で、私たちが出来る唯一の選択は、ただ空を見上げ「主よ！神よ！」と叫ぶか、心の中で悲鳴を上げることしか出来ません。

それ以外、出来ることは何一つないような場面、場所、状況です。

聖書にも、二進も三進も行かないどん詰まりのような所へと導かれていく人々が登場してきますが、
彼らが、そこで出来ることは何もありません。

唯一出来ることと言えば、「ああ、もうダメだ！」という思いを抱くことだけです。

そして、「こんなはずじゃなかったのに、何でだ!？」という納得のいかない恨み節しか湧いてきません。

去年の年末礼拝のメッセージの中で、石田先生も触れてくださいましたが、出エジプトをして、約束の地に向かって進んでいるイスラエルの民たちが直面している場面も、正に、どん詰まりの、行き詰まりの、二進も三進もいかない袋小路のような状況でした。

出エジプト記14章に行ってみましょう。

出エジプト記14：5－14（パワポ）

40歳の時エジプトの王子という栄光の地位から転落し、40年間羊飼いと静かに暮らしていた80歳のモーセに主なる神様は突然現れ、「あなたを、あなたの同族イスラエルの民たちをエジプトの奴隷の身分から贖いだすリーダーとして立てる」と、お告げになりました。

何の前触れもない唐突な神様からのその申し出を、モーセは、何でも出来る限り丁重に断ります。

「80歳の高齢の私に何が出来るんでしょうか？」

しかも、私はとても無口で人前で話すことなんか出来ませんし、どこからともなく突然現れた老いた羊飼いでしかない私を、イスラエルの民たちの誰が、リーダーとして認めてくれるんですか？

そもそも、あの巨大国家と権力者ファラオに立ち向かえるようなものを、私は何一つ持っていません！

いくら神様だからと言って、そんな現実離れした提案を、はいそうですかと、受け入れることは出来ません！」と、モーセは本当に口下手なのかと思うほどに、神様に対して口達者に断りました。

まあ、モーセが断ったところで、神様が一度なさると思われたことはなさいますから、結局神様の説得に導かれて、モーセは12の災いという神の起こされた奇跡を目の当たりにしながら、ついに200万人以上のイスラエルの民たちをエジプトの奴隷の身分から救い出します。

しかも、イスラエルの民たちは、エジプトから出てくる時一文無しのすっから

かんの状態が出てくるようなことはなく、金や銀や衣服、食べ物などたくさんの手土産と共に出てくることができました。

彼らイスラエルの民たちは、「ああ、長年の苦勞がこれでやっと報われた！ 私たちはやっぱりアブラハムに連なる神の選ばれし民だったんだ！ しかも今、新たな約束の地へと導かれて行くんだ！」と、意気揚々と出てきました。

しかし、彼らが出て来てしばらくすると、エジプトのファラオの気持ちが変わって、選り抜きの軍隊を率いて自分たちのことを追跡しているという知らせを受けました。

が、最初は全くもって余裕です。

「どんなに追われたところで、この先も必ず、私たちの行く道は開かれて行く！」という自信に満ち溢れていました。

その時の気持ちを表しているのが、8節の言葉です。

出エジプト記14：8（パワポ）

まだ、この時点では、余裕綽々です。

エジプトで経験したファラオを打った12の災いの記憶がまだ鮮明だったのか、金や銀などの財産が有るから大丈夫と思ったのか、はたまた雲の柱と火の柱によって守られているから、「エジプトの追手ごときどうにでもなる」という自信に満ち溢れていたのか、

もしくは、その全部の思いが入り混じって、臆することがなかったのかもしれませんが。

しかし、ファラオ率いるエジプトの軍隊が後方に迫り、目の前にはどうすることも出来ない海にその行く手を阻まれて、正に、袋小路に追い込まれたネズミのような状況に追い込まれると、事態は一変します。

200万人の群衆がパニックに陥り、空にこぼしを突き上げながら、「おい神よ、何とかしてくれ！」と叫びました。

でもここで問題なのは、神様は目に見えるお方ではありません。

だから、どんなに空に向かって叫んだところで、空を打つようで、何の手ごたえも感じません。

そこで、今度は、目に見える対象・人物、特にここでは神が立てたリーダー、モーセにその不安と不平の矛先が向けられます。

出エジプト記 14 : 11 - 12 (パワポ)

苦勞が報われた、財産を手にした、新しい門出を迎えることが出来た、神のなさった12の災いという奇跡を体験できた、雲の柱もあるし火の柱もあるという意気揚々とした自信は、何処へやら、見る影もなく怯え、震えおののきました。

何よりも彼らの心に沸き上がった思いは、納得が行かないということでした。「こんなはずじゃないだろう！ 何でだ！」という思いです。

まあ、当然ちゃ当然です。

今まで見たこともないような12の災いの奇跡をもって、自分たちの力ではどうすることも出来なかった奴隷という身分から解放され、神様が共におられるという鬼に金棒のような気持ちで、これからはどんなことがあっても、天の御国のブルドーザーで、何でもかんでも更地にするような力の元、歩いていけると思った矢先の袋小路のどん詰まりです。

しかも、そのどん詰まり方と言ったら、エジプトで奴隷生活をしていた時でさえ体験したこともないような、どん詰まりです。

今直面しているどん詰まりに比べたら、400年間の奴隷生活の方がよっぽどましだったと思えるようなどん詰まりです。

意気揚々とした気分は、一瞬にして吹っ飛び、神にも裏切られたし、モーセにも騙されたという思いでいっぱいです。

「400年間のエジプトの奴隷生活は苦役ではあったけれども、餓死する可能性はほぼ無く、泣く子も黙る権力者ファラオ率いるエジプトの精鋭部隊に命狙われることなんかも普通に生活していればほぼ無く、『苦しいけれども、衣食住のために明日も生きよう』と、微かかもしれないけれども、淡い思いを抱くことの出来る生活だった」と、苦しかった過去の経験が美化されてしまうほどのどん詰まりに追いやられました。

Part Two

彼らイスラエルの民たちが出エジプトをしてまず期待していたのは、「もう大丈夫！ 自由を手にし、約束の地に入るという約束まで与えられ、僕たち私たちの生活は、完全に保証されたようなものだ！ やっぱり人生は、将来を見据えた保証だし、安泰だし、平穩無事だよ」というものでした。

つまり、信仰＝保険、神＝保障、出エジプト＝安泰という、物質世界に対する欲求と欠乏が満たされることだと思っていました。

この3次元の時間と空間の中で営まれている物質世界で生活している私たち人間は、物質的な保険、保証、安泰が見込まれることを、将来の安定だと考えます。

つまり、伝道者の書7章の言葉を借りるならば、「後のことが分かるようになる」ということです。

物質が満たされると、または、物質的に安定した状態になることをもって、「後のことは大丈夫だ」と言います。

詰まるところ、信仰も、神も、救いも、

物質という無機質な物を、憧れや崇拜の対象である偶像に仕立て上げて、その偶像をより良く着飾(きかざ)らせるための道具や手段に過ぎないということです。

無機質ですから、そこには、血の通った関係構築という思いはありません。

また、道具や手段ですから、消費し、無くなれば取り換え、壊れれば新しい物を購入すればいいだけのことです。

要するに、「使えない」と思えば、「まったく、使えねえなあ！」と吐き捨てて、信仰も、神も、救いも、捨ててしまえばいいだけのことです。

でも、主なる神様がイスラエルの民たちを救い出し、望んでおられたのは、血の通った関係構築です。

どこまでの関係構築かと言いますと、「あなたなしには生きられない！ あなたがいれば、何にもなくても大丈夫！ 地球が滅びようと、世界が終わろうとも、あなたさえいればそれでいい！ あなただけが生きる目的であり、目標であり、唯一無二の宝だ！」というほどの関係構築です。

神の思いは、イスラエルの民たちの思いとは、だいぶ違うものでした。イスラエルの民たちは、関係よりも保険。関係よりも保障。関係よりも安泰です。

良い結婚をするための条件として、高学歴、高収入、高身長なんてことが言われたりもしましたが、まさに、これこそ関係よりも保険。関係よりも保障。関係よりも安泰という価値観の中で出て来た条件ですよね。

自分の保険と保障と安泰のために、配偶者を利用しようという魂胆がそこにはあります。

関係は二の次です。関係よりも、物質的安定が優先されます。

でも、本当に、これが合ってるのでしょうか？

私自身は結婚する前から、こんなのは間違いだと思っていましたけれども、結婚してなお一層、こんな考え方は間違っているし、真の価値からは程遠いということを確認出来ました。

これからどうやって生きようか？
これからどこに進めばいいのか？
この状況を、どこからどう、突破すればいいのか？
この痛みをどう抱えて生きて行けばいいのか？
この暗闇に果たして光は指すのだろうか？
いつまで、もがき続ければいいのか？

という、正に、八方塞がりのような所に追いやられて一緒に泣きながら、一緒に祈りながら、一步踏み出すことさえたまらなく苦しくて、辛くて、重くて、痛いところを一緒に通って構築されていく血の通う関係こそが、力であり、誉れであり、勲章であり、富であり、掛け替えのないものであることを知りました。

物に価値があるのではなく、関係にこそ価値があることを、夫婦体験を通して確認出来ました。

関係さえ構築出来ていれば、物なんか、どうにだってなります。
逆に、どんなに物質が満たされていても、関係が良くなければ、物なんか何の価値もなければ、何の威力も発揮しません。

ただ、所有しているという自己満足で終わります。
そして、襲ってくるのは、空しさと恐れです。

その事を誰よりもよく分かっておられる父なる神様は、イスラエルの民たちと関係を構築しようとされました。

でも、ここでちょっと厄介なのが、人間誰しもがそうであるように、神の民と言われるイスラエルの民たちでさえ、関係よりも無機質な物質の満たしに価値を置き、神を利用しようとするので、神様は、

これからどうやって生きようか？
これからどこに進めばいいのか？
この状況を、どこからどう、突破すればいいのか？
この痛みをどう抱えて生きて行けばいいのか？
この暗闇に果たして光は指すのだろうか？
いつまで、もがき続ければいいのか？

という、八方塞がりの袋小路のような所にあえて導き、一緒に泣き、一緒に祈

り、一緒に一歩踏み出すことの大切さを教えようとなさいました。

そして、決して忘れることの出来ない関係構築を、一つ一つ積み重ねていけます。

Part Three

信仰生活とは何か？ 何でしょう？

神との関係構築です。

それも、神との関係構築よりも目先の物質に狙いを定め、その的を狙い撃ちするために、神を手段として無機質に利用しようとする神の価値観と中々噛み合わない私たち人間と、神との関係構築です。

この関係構築に比べれば、人間とある程度知能を持った動物との関係構築の方がよっぽど楽かもしれません。

愛情を注げば、注いだけ、答えてくれますが、人間は、どんなに愛情を注いでも、すぐ忘れます。

愛情を注がれたという瞬間は、何だか心が和んで、神様イエス様の方に視線を向けますが、すぐに冷めて、また他のところに心が惹かれて行きます。

だから神様は、「後のことを人に分からせないように」されました。

後のことを人が分かってしまったら、まず、この物質世界で生きている罪人である私たち人間は、神様により頼むことはしないでしょう。

もちろん、私たちクリスチャンは、後の後の後のこと、最後の最後のこと、つまり終末と新天新地と神の国到来については知っています。

ただし、そこに入るためには関係構築が求められます。

神と血の通った関係構築が求められます。

いつも守られ、いつも満たされ、いつも答えてくださるというようなべらべらな甘ったるい関係ではなく、

どん詰まり、行き詰まり、二進も三進もいかない袋小路のようなところを一緒に通って構築される解くことなんか決して出来ないような堅い関係です。

そのためにイエス様は血を流されました。

真に血の通った関係を構築しようと、全く罪なきご自分の血を流されました。

開いた墓のような喉を持ち、舌を持って欺き、その唇の下にはまむしの毒があ

り、その口は滑らかなふりをして呪いと苦みに満ちていて、人の血を流すのには速く、破壊と悲慘があり、平和の道を知らず、挙句の果てに神に対する恐れのない私たちと、血の通った関係を構築しようと、人の姿をもって来られた神である主イエス様は、ご自分の血を流されました。

だから私たちが、主イエス様から命じられて執り行っている聖餐式は、神と血の通った関係を構築するための道のりを歩ませられているということの確認の場でもあります。

イスラエルの民たちが、出エジプトをする時に経験したエジプトの初子をすべて打つという最後の災いを免れるために、いけにえとして献げられ血を流した罪なき傷なき子羊は、主イエス様が十字架上で血を流されたことを表わすものです。

つまり、イスラエルの民たちも、この過ぎ越しの恵みをもって、主イエス様の血を流す程の愛と、神との関係構築の道程に入れられたということを経験したことになります。

Part Four

神様が、イスラエルの民たちを出エジプトさせた第一義的な理由は、約束の地を与えることでもなく、よりよい生活を保障するためでもなく、皆から羨ましがられる新しい国家を作り上げるためでもありません。

イスラエルの民たちを出エジプトさせた第一義的な理由は、神との関係構築です。

出エジプト記に何度も出てくる、出エジプトの理由を記した表現があります。それは、「荒野へ三日の道のりを行き、いけにえを献げる」という言葉です。

「荒野へ三日の道のりを行き、いけにえを献げるために、奴隷の身分から解放して欲しい」と訴えるモーセに対して、

ファラオは、「いやいや。わざわざ全イスラエル200万人を総動員して、三日もかけて荒野に出て行き、いけにえを献げる必要なんかないじゃないか！ここエジプトの地で献げればいいじゃないか！」と、反発します。

でも、モーセは、断固として「いやいや。私たちは、三日の道のりを全イスラエル200万人を総動員して出て行き、すべてを断ち切り、全人生、全生活、全行程を懸けて、主なる神様にいけにえを献げなければなりません！」と、公然と主張しました。

では、いけにえを献げる行為とは何でしょう？

礼拝ですね。

では、礼拝とは何でしょう？

礼拝とは、神との関係構築そのものであり、主イエス様によって、神と血の通った関係構築の間柄にされたという確認の場であり、恵みの場でもあり、すべての根本に値する場です。

だから、礼拝には、言葉で説明の出来ない安らぎがあり、癒しがあり、回復があり、力を与えられるんです。

物質に安らぎがあり、癒しがあり、回復があり、力があるのではありません。神との関係構築にこそ、安らぎがあり、回復があり、力があるんです。

Conclusion

伝道者の書の著者ソロモンは、“後のことを分からせないため”に、主は私たちに、順境の時と逆境の時と、時にはどん詰まりの八方塞がりの袋小路のような時を織り交ぜながら、お与えになると教えてくれます。

「出来れば、どん詰まりのようなところへと導かれていくのは勘弁してほしい」と思いますが、

私たちは、後のことが分かりようもないですが、分かると錯覚するだけでも、神の御業と恵みと救いを見出さず、勝手気ままに生きてしまうので、あえて、袋小路へと導きなさいます。

びっくりするような祝福と、恵みと、奇跡の体験を通して、私たちとの関係をより深め、堅くするためにです。

イスラエルの民たちは、どん詰まりの、行き詰まりの、八方塞がりのところで、「主が自分たちをお救いになるために、自分たちのために戦われる」という体験をしました。

そして、関係が深められていきました。

出エジプト記 14 : 13 - 14 (パワポ)

私たちは、後のことが見えないし分からないと、嘆く必要はありません。

もちろん、弱い存在ですから、嘆かずには生きられないかもしれませんが、人生そのものを嘆く必要のない神との関係構築へと入れられていることを覚えたいと思うんです。

私たちには、ちょっと先のこともわからないですが、最後の最後のことについて

ては知っています。

だから、後のことが見えない分らないと嘆く代わりに、「この時も、神との関係が深められていくために用いられ、また、私たちの想像を遥かに超える奇跡と救いと導きを体験させていただく貴重な時だ」と、信じて、歩いていきましょう。

主イエスを信じる者に許されているのは、永遠の滅びではなく、永遠の救いであり、永遠のいのちです。

今この時も、神との関係が深められている瞬間です。

お祈りいたします。

祝祷：出エジプト記 14：13 a－14 a